

## シナリオAとシナリオBはどこから眺められているか ベネターが誕生害悪論に密輸入したもの

清水大毅\*

### 1. はじめに

本論では、デイヴィッド・ベネターの誕生害悪論について、大胆で挑戦的な考察を行う。ここでは、ベネターの議論についてのみ扱うが、本論は、誕生や出産をめぐる哲学に大きく寄与するものがあると考えている。2節でベネターの議論を概観し、3節で「存在」という語がどのようなものを表すかについて考察を行う。4節でベネターがシナリオA、シナリオBを等しく見渡す視点を密輸入していることを指摘し、5節でベネターの議論を再度考察する。

### 2. ベネターの誕生害悪論

ベネターは著書 *Better Never to Have been* (2006) (以下 BNHB) において、基本的非対称性を論拠に、存在するようになる人の利害に照らし合わせて考えれば、存在するようになることは常に悪いことを論証した。本節で、簡潔にベネターの議論<sup>1</sup>を確認する。

まず、ベネターが論じているのは「存在するようになること<sup>2</sup> coming into existence」と「決して存在しないこと never coming into existence」の比較であって、「存在するようになること coming into existence」と「存在しなくなること ceasing to exist」の比較ではない。「存在するようになること」は「決して存在しないこと」より悪いが、「存在しなくなること」より必ずしも悪いわけではない。二つの評価は全く別である。

---

\* 大阪公立大学大学院文学研究科修士課程  
電子メール: daiki.shimizu8gx[a]gmail.com

<sup>1</sup> ベネターの議論についての詳しい解説は、森岡 (2021a)、吉沢 (2022) などがある。

<sup>2</sup> Coming into existence の訳としては不自然かもしれないが、「存在」という言葉を入れたかったのでこのように訳した。

次に「非存在 non-existence」の意味を確認する。ベネターによれば、「非存在」という語は曖昧であり、「決して存在しない人 those who never exist」を指すこともあるが、「現在存在しない人 those who do not currently exist」を指すこともあるという。さらに、「現在存在しない人」に関しては、「まだ存在しない人 those who do not yet exist」と「もはや存在しない人 those who are no longer existing」に分かれる<sup>3</sup>。ベネターが BNHB の第2章で論じているのは、「存在すること」と「決して存在しないこと」の比較であり、「非存在」という語は「決して存在しないこと」を指す<sup>4</sup>。また、「決して存在しない」という意味での「非存在」が何を指すかというところ、「決して現実には生じない可能的な人々 those possible people who never become actual」を指すという<sup>5</sup>。

なぜ、「存在」は「非存在」より悪いのかということ、害悪と利益には非対称性があるからである。ベネターは、害悪（例えば苦痛）と利益（例えば快樂）について、次のように評価する<sup>6</sup>。

- (1) 苦痛の存在 presence は悪い
- (2) 快樂の存在は良い
- (3) 苦痛の不在 absence は良い、たとえその良さが誰にも享受されなかったとしても
- (4) 快樂の不在は悪くない not bad、その不在が剥奪となるような誰かがいない限り

ベネターがこの基本的非対称性<sup>7</sup>を説得的だと考えるのは、無視できない四つの非対称性を説明することができるからである。

ところで、(3)に関して、苦痛の不在を享受する人がいないのに、なぜ良いと評価できるのだろうか。(3)に関しては、存在する人、もしくは、存在しな

<sup>3</sup> Benatar (2006), p.30. ベネターはジョエル・ファインバーグの見解を採用して、「まだ存在していない人」と「もはや存在していない人」に関しては、害悪を被りうると述べている。

<sup>4</sup> 予告しておくところ、この区別には不十分であると筆者は考えているが、ひとまずベネターの議論を追う。

<sup>5</sup> Benatar (2006), p.30.

<sup>6</sup> Benatar (2006), p.30.

<sup>7</sup> 害悪と利益についての非対称性を、Benatar (2012)では基本的非対称性と呼んでいるので、本論でもそれに従う。

い人の利害に照らし合わせて、判断がなされているとベネターは説明する<sup>8</sup>。存在している人の場合、(3)が述べているのは、現在存在している人の利害で判断すれば、苦痛の不在は良かったであろうということである(たとえ苦痛の不在が、その人が存在しないことでしか達成できなくても、そうである)。決して存在しない人の場合、(3)が述べているのは、現実とは違って存在したであろう人の利害で判断すれば、苦痛の不在は良いということである。

ベネターの説明は分かりにくいので、説明しなおそう。ベネターはある存在者 X が存在する場合をシナリオ A と呼び、X が決して存在しない場合をシナリオ B と呼んでいる<sup>9</sup>。ベネターが述べているのは、シナリオ B の苦痛の不在に関して、シナリオ A に存在する人の利害に照らし合わせて判断ができるということである。シナリオ A が現実である場合は、シナリオ A に存在する人は現実の存在者である。この場合、現実の存在者(シナリオ A)の利害に照らし合わせて、シナリオ B の苦痛の不在を評価する。シナリオ B が現実である場合は、シナリオ A に存在する人は可能的な存在者である。この場合、可能的な存在者(シナリオ A)の利害に照らし合わせて、シナリオ B の苦痛の不在を評価する。

シナリオ B における苦痛の不在、及び、快樂の不在について何らかの評価ができることが分かった。基本的非対称性には、四つの非対称性を説明することができるので、説得力があるとベネターは言う。その四つの非対称性とは、次の四つ<sup>10</sup>である。

(i) 生殖に対する利益の非対称性

悲惨な人生を送るだろう人々を生み出すことを避ける義務はあっても、幸福な人生を送るだろう人々を生み出さなければならない義務はない

While we have a duty to avoid bringing into existence people who would lead miserable lives, we have no duty to bring into existence those who would lead happy lives.

(ii) 予想される利益の非対称性

子供を持つ理由として、その子供がそれによって利益を受けるだろうとい

---

<sup>8</sup> Benatar (2006), p.31.

<sup>9</sup> Benatar (2006), p.37.

<sup>10</sup> Benatar (2013), p.123. 邦訳 41 頁。

うことをあげるのはおかしい。子供を持たない理由としてその子供が苦しむだろうということあげるのはおかしいわけではない

It is strange to cite as a reason for having a child that that child will thereby be benefited. It is not similarly strange to cite as a reason for not having a child that that child will suffer.

(iii) 回顧的利益の非対称性

苦しんでいる子供を存在させてしまった場合、その子供を存在させてしまったことを後悔すること、そしてその子供のためにそれを後悔することは理にかなっている。対照的に、幸せな子供を存在させることができなかった場合は、その子供のためにそのできなかったことを後悔するのはいり得ない。

When one has brought a suffering child into existence, it makes sense to regret having brought that child into existence—and to regret it for the sake of that child. By contrast, when one fails to bring a happy child into existence, one cannot regret that failure for the sake of the person.

(iv) 遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性

私たちが遠くで苦しんでいる人々のことを悲しく思うのは当然だ。それとは対照的に、無人の惑星や無人島、この地球の他の地域に存在しない幸せな人々のために涙を流す必要はない。

We are rightly sad for distant people who suffer. By contrast we need not shed any tears for absent happy people on uninhabited planets, or uninhabited islands or other regions on our own planet.

ベネターによれば、基本的非対称性には、四つの非対称性を説明する力があるので、説得力がある<sup>11</sup>。そして、基本的非対称性を前提に、Xが存在するシナリオAと、Xが決して存在しないシナリオBを比較した場合、シナリオAはシナリオBにどの点でも優らないのである。シナリオAとシナリオBの比較を、ベネ

---

<sup>11</sup> Benatar (2006), p.37.

ターは次の図<sup>12</sup>で表している。

シナリオ A (X exists)	シナリオ B (X never exists)
(1) 苦痛の存在 悪い (Bad)	(3) 苦痛の不在 良い (Good)
(2) 快樂の存在 良い (Good)	(4) 快樂の不在 悪くない (Not bad)

そして、基本的非対称性から「存在するようになることは常に害悪である」という結論が導かれる。なぜかという、(1)と(3)の比較、(2)と(4)の比較のどちらにおいても、シナリオ A はシナリオ B に対して優っていないからである。

(1)と(3)を比較した場合、(3)は(1)より良い。苦痛に関しては、シナリオ A はシナリオ B に対して優っていない。

(2)と(4)を比較した場合、一見(2)は(4)より良いように見える。しかし、シナリオ B の快樂の不在は、剥奪を意味するわけではないので、(2)が(4)より良いという評価にはならない。ベネターが述べるには、快樂の不在は、内在的に悪いのではなく相対的に悪いという。剥奪されることによって、快樂が不在になる場合は、快樂の不在は快樂の存在「より悪い worse」という意味で悪い。言い換えると、シナリオ A における快樂の不在は、シナリオ A の快樂の存在より悪い。シナリオ B における快樂の不在は、剥奪を意味しないのであった(快樂を剥奪されるような存在者が、シナリオ B においては存在しない)。そのため、シナリオ B の快樂の不在は、シナリオ A の快樂の存在と比較して悪いのではない not worse。このような意味において、シナリオ B の快樂の不在は悪くない not bad ののである。(4)は(2)より悪いわけではないということは、(2)は(4)より良いわけではないことと同義である。よって、快樂においても、シナリオ A はシナリオ B に対して優っているわけではない。

<sup>12</sup> Benatar (2006), p.38. なお、図は筆者が再構成したものである。

以上により、苦痛においても快樂においても、シナリオ A はシナリオ B に優れているところがなく、「存在するようになることは常に害悪である coming into existence is always harm」という結論が導かれる。

### 3. 存在の多義性<sup>13</sup>

前章でベネターの議論を概観した。基本的非対称性の妥当性に関して、批判が殺到している。私もその批判に同意<sup>14</sup>するものの、本論ではベネターの議論を新しい角度で考察したいため、その批判を取り上げることは行わない。筆者のベネター批判に移る前に、筆者の考える重要な論点をここで確認することにした。

再度強調するが、「存在するようになること coming into existence」と「決して存在しないこと never exist」を比べているのであって、「存在するようになること」と「存在しなくなること」を比べているのではない。「決して存在しないこと」と「存在しなくなること」は同じ「非存在」という語で表されたとしても、別のことを指しているのであった。ところで、「存在」という語は、常に同じものを指しているだろうか。もっと言うと、「決して存在しない」の対比項である「存在するようになること coming into existence」と、「存在しなくなる」の対比項である「存在する」は同じだろうか。実は、両者は別のことを指しているにもかかわらず、その二つを適切に扱うことができないまま議論が進んでいるというのが、筆者の診断<sup>15</sup>である。まず、次の図を見て欲しい。この図は、ベネターが述べていること<sup>16</sup>から、榊原清玄<sup>17</sup>が作成した図である。なお、榊原は「未だ存在していない者」を「未存在」と呼び、「前は存在していたが今はもう存在していない者」を「不存在」と呼んでいる。

---

<sup>13</sup> 存在の一義性とは何の関係もない。

<sup>14</sup> 特に Boonin (2012)と Magnusson (2019)の批判が優れている。その二人の解説は、鈴木 (2019)と榊原 (2020)に詳しい。

<sup>15</sup> ベネターが二つの「存在」の区別に全く気づいていないというのは、言い過ぎかも知れない。というのも、第2章においては、「シナリオ A の成立」を意味する場合は coming into existence という語を使い、「シナリオ A の中のある時点に存在する」を意味する場合は exist という語を使っている傾向にある。だが、私がこれから指摘するようなことを、議論において適用できていないのは事実である。

<sup>16</sup> Benatar (2006)

<sup>17</sup> 榊原 (2021b)

シナリオ A	未存在 未だ存在してい ない	存在	不存在 もう存在していな い
シナリオ B	非存在 今も存在していないし、これからも存在することはない		

榊原の図<sup>18</sup>

だが、この図には不足があると筆者は考えている。なぜなら、「シナリオ A が成立する」という意味での「存在する」と、「ある時点で存在する」という意味での「存在する」が必ずしも明瞭に区別されていない<sup>19</sup>からだ。筆者は榊原の図を次のように修正したい。なお、「決して存在しない（シナリオ B）」の対比項にあたる「存在」を「シナリオ A」もしくは「存在するようになる Coming into existence」といい、「未存在」「不存在」の対比項にあたり、「ある時点で存在する」という意味での存在を「現在存在<sup>20</sup>」ということにする。榊原にならって、「まだ存在しない」を「未存在」、「もはや存在しない」を「不存在」と呼ぶことにする。また、シナリオ B における「非存在」は、「未存在」「現在存在」「不存在」のどれとも区別されるので、「どの時点でも存在しない」と言い表すことにする。ベネターが述べていること及び榊原の図を、筆者の観点から図にすると次の図のようになる。

<sup>18</sup> 榊原 (2021b)の図を筆者が再構成したものである。

<sup>19</sup> 「区別されていない」と述べるのは言い過ぎかもしれない。榊原はシナリオ A とシナリオ B に関して、「シナリオ A はある感性的主体 X が一度存在するシナリオであり、シナリオ B は X がかつて存在することなく、今も存在せず、これからも存在することがないシナリオである」と述べている。だが、この差異について榊原は論文上で追求しているわけではない。

<sup>20</sup> 「存在しなくなる」という意味での非存在は「もはや存在しない人」と同義であるので、「もはや～ない (no longer)」と対比して「現在存在 (now existence)」とした。「現実存在」や「現存在」と似ているが、全く関係ない。

シナリオ A X が存在する	未存在	現在存在	不存在
シナリオ B X が決して存在し ない	非存在 (どの時点でも存在しない)		

清水の図 1

ところで、「存在しなくなること」に関して、ベネターはシナリオ C と呼んでいる<sup>21</sup>。ベネターは、シナリオ C に関しては、苦痛の不在は「良い」で、快樂の不在は「悪い」と評価している。快樂の不在を「悪い」と評価する理由は、存在しなくなることによって、シナリオ A に存在する人（現在存在）から、得られたであろう快樂を剥奪しているからだと考えられる<sup>22</sup>。

シナリオ A X が存在する	未存在	現在存在	不存在 (シナリオ C)
シナリオ B X が決して存在し ない	非存在 (どの時点でも存在しない)		

ベネターは上記の図のように考えているかもしれないが、実は誤りがあるのではないだろうか。なぜなら、「不存在」において、「現在存在」は成り立たないかもしれないが、「不存在」においても、シナリオ A は成り立っているからである。別の言葉で言い換えよう。存在者 X がもう死んでしまった場合は、「存在者 X が現在存在する」ということは成り立たない。しかし、死んでしまったからといって、「存在者 X がかつて存在した」という事実が消え去るわけでもないし、「存在者 X が生まれてきた」ということがなかったことになるわけで

<sup>21</sup> Benatar (2006), p.45.

<sup>22</sup> ベネターは死に関して、「時に害悪であり、時に利益である」と述べている。

もない。シナリオ C もシナリオ A の一部と解釈するべきではないだろうか。

そこでベネターを離れて、筆者は次のように考えたい。まず「現在存在」とシナリオ A は別である。そして、「未存在」「現在存在」「不存在」の全てにおいて、シナリオ A は成立していると考ええる。そして、「未存在」「現在存在」「不存在」はそれぞれ可能世界を表すものだと考える<sup>23</sup>。それぞれ順に「存在者 X が現在存在していないが、現在より先の時点で存在するような世界」「存在者 X が現在存在する世界」「存在者 X が現在存在しないが、現在より前の時点で存在した世界」と解釈する。以上のことを図にまとめると、次のようになる。

シナリオ A X が存在する	未存在 (シナリオ A)	現在存在 (シナリオ A)	不存在 (シナリオ A)
シナリオ B X が決して存在しない	非存在 (どの時点でも存在しない)		

清水の図 2

ここで確認したい点は、次の二つである。一つは「現在存在」がなければ、「未存在」も「不存在」も成り立たないことである。また「未存在」「現在存在」「不存在」の間には、時間的な前後関係があることだ。「現在存在」から「不存在」に変容することはあっても、逆はあり得ない。もう一つは、シナリオ A とシナリオ B をわかつのは「現在存在」があるかどうかである。シナリオ A と「現在存在」は別のことだが、シナリオ A とシナリオ B を分つのは「現在存在」の有無に依存するため、議論の際には注意が必要である。

ところで、注釈でも述べた通り、ベネターはシナリオ A の成立ことを「存在するようになる coming into existence」と言い表す傾向にある。しかし、シナリオ A とシナリオ B を、図を用いて比較する際には、シナリオ A のことを「X が存在する X exists」と言い表している。これは同じ語の言い換えなのだろうか。確かに coming into existence という語は長いので、図を書く際には不便である。

<sup>23</sup> ではシナリオと可能世界はどのように違うのか。シナリオにおいては順序関係が重要だと考えられるが、可能世界に関しては必ずしもそうではない。明瞭な分析は、今後の課題とする。

しかし、この言い換えは同じ語の言い換えとは言えず、ベネターは、議論において、シナリオ A と「現在存在」を混同しているのではないかと筆者は診断する。他の論者に対する応答論文<sup>24</sup>（以下、SBNHB）の中で、そのことが如実に表れている部分<sup>25</sup>があるので、それを参照していく。

私に関心を持つのは、そう [非人格的評価] ではなく、存在するようになること **coming into existence** は、存在するようになる人にとって利益であるのか、それとも、もし決して存在しなかったとしたら、その人にとってより良かったのだろうか、ということである<sup>26</sup>。

ここでベネターは、存在するようになる人にとってシナリオ A は良いのか、それともシナリオ B の方が良いのかということに、自分に関心があると述べている。ベネターはこの前後で、自身に対する批判を紹介し、決して存在しないことの良さは、非人格的な評価によるものではないことを述べている。そして、「決して存在しないことは、ある人にとってより良い **it is better for a person that he never exist**」ということは、より複雑な考えの簡略表現として理解するならば、主張することができる、ベネターは述べる。そのより複雑な考えを説明したのが次の箇所である。

私たちは二つの可能世界を比較している—ある人が存在する世界とある人が存在しない世界である **one in which a person exists and one in which he does not**。それらの可能世界のどちらがより良いかを判断する方法の一つは、それらの二つの可能世界のうちの一方（一方のみ）に存在する人の利害を参照することである。（中略）それゆえ、存在する人について、もし決して存在しなかったとしたら、その人にとってより良かったらと主張することができる。人が存在しない場合、別の可能性において存在していたかもしれない人について、もしその人が存在していたなら、「決して存在しなかったとしたら、その人にとってより良かったら」と主張することができる。いずれの場合も、選ぶべき **alternative** 二つの可能世界のうち、

<sup>24</sup> Benatar (2013)

<sup>25</sup> Benatar (2013), pp.125-126.

<sup>26</sup> Benatar (2013), p.125. [ ]は筆者による補足。

一方に存在する人について、何かを主張している<sup>27</sup>。

ここでベネターが述べていることは、**BNHB** で苦痛の不在をどのように評価するかについて述べていたこと<sup>28</sup>と、基本的には大差がない。ここでベネターは明らかな誤謬を犯している。それは、「決して存在しないことは、ある人にとってより良い」ということを、「**X** が存在する可能世界」と「**X** が存在しない可能世界」の比較に置き換えている箇所である。**BNHB** で主張していたことは、「存在するようになること」は「決して存在しないこと」に優らないということであった。「**X** が存在する可能世界」は本論の言葉でいう「現在存在」とほとんど同義である。「存在するようになること」の悪さを述べるならば、「存在するようになること」と「決して存在しないこと」の二つを比較しなければならない。先ほども確認した通り、「現在存在」と「存在するようになること」は別のことであった。よって、「**X** が存在する世界」と「**X** が存在しない世界」の二つを比較して、「存在するようになること」の悪さを導くのは誤りである。もし、**SBNHB** における記述（二つの可能世界の比較）が、**BNHB** における図 2-1<sup>29</sup>においても同じことが言えるなら、シナリオ A を「**X** が存在する」と言い表したことは、明らかな誤謬である。

ところで、次のことに注意したい。筆者が主張しているのは、シナリオ A（存在するようになること）とシナリオ B（決して存在しないこと）を比較することと、「**X** が存在する可能世界」と「**X** が存在しない可能世界」を比較することは、異なるということである。その一方で、「ある世界に存在する人の利害」を参照して、シナリオ A とシナリオ B を比較することに関しては、問題はないということだ。つまり、シナリオ A が現実である場合、「現在存在」の利害を参照してシナリオ B を評価することはできる。そして、シナリオ B が現実である場合、シナリオ A 中の「現在存在」の利害を参照して、シナリオ B を評価することもできる。筆者が指摘しているのは、あくまでシナリオ A を「**X** が存在する可能世界」に置き換えている点である。

議論において、「存在」という語に混同がある、もしくは区別を適切に扱えて

---

<sup>27</sup> Benatar (2013), p.125.

<sup>28</sup> Benatar (2006), pp.30-31.

<sup>29</sup> Benatar (2006), pp.37-38.

いない<sup>30</sup>ことがわかった。ところで、シナリオ A とシナリオ B の優劣に関して、必ずしも「現在存在」と「非存在」を比較しなければならないのだろうか。ベネターは、自身の議論が、ある人生が悪いことを全く含まず、良いことのみ含む仮想的な場合には当てはまらないと述べている<sup>31</sup>。このことから、本論で言う「現在存在」と「非存在」の比較によってのみ、シナリオ A とシナリオ B の優劣ができるものだと考えている<sup>32</sup>。だが、ベネターの論理を拡張するなら、たとえ悪いことが全くないような人生であったとしても、決して存在しない方が良いということが帰結すると、筆者は考える。文字通り苦痛を一切被らず、快樂に満ち溢れた人生をおくる人 (M とする) を考えてみよう。この場合、「現在存在」とシナリオ B を比較すると、次の図のようになる。

現在存在 (M exists)	シナリオ B (M never exists)
(1) 苦痛の不在 良い (Good)	(3) 苦痛の不在 良い (Good)
(2') 快樂の存在 良い (Good)	(4) 快樂の不在 悪くない (Not bad)

苦痛においても、快樂においても、M の「現在存在」は、「非存在」に優っているとも劣っているとも言えないだろう。だが、M の「不存在」と「非存在」を比較すると、「不存在」は「非存在」に優らないことがわかる。

<sup>30</sup> この原因は主に二つ考えられる。一つはシナリオ A と「現在存在」は別のことであるにも関わらず、シナリオ A とシナリオ B を分つのは「現在存在」の有無であることだ。もう一つは、ベネターは暗黙理に、「X が存在する可能世界」と「X が存在しない可能世界」を等しく眺めるような視点に立っているからだとも考えられる。このことは4節で指摘する。前注も参照。

<sup>31</sup> Benatar (2006), p.29.

<sup>32</sup> 先に示した通り、「Coming into existence」を「X exists」に置き換える誤りを犯しているのだから、このことはある種自明かもしれない。

不存在 (M no longer exist)	シナリオ B (M never exists)
(1) 苦痛の不在 良い (Good)	(3) 苦痛の不在 良い (Good)
(2') 快樂の不在 悪い (Bad)	(4) 快樂の不在 悪くない (Not bad)

「不存在による快樂の不在」は「快樂の存在」より当然悪い。ところで「快樂の存在」は「Bにおける快樂の不在」に比べて良いわけではないのであった。したがって、「Bにおける快樂の不在」に優っていない「快樂の存在」よりも、「不存在による快樂の不在」はさらに悪いのである<sup>33</sup>。よって、上記の(2')と(4)を比較すると、(2')は(4)より悪いことになる。よって、ベネターの論理を拡張すると、どんな場合においても、存在するようになることは害悪であるということが帰結するのだ。

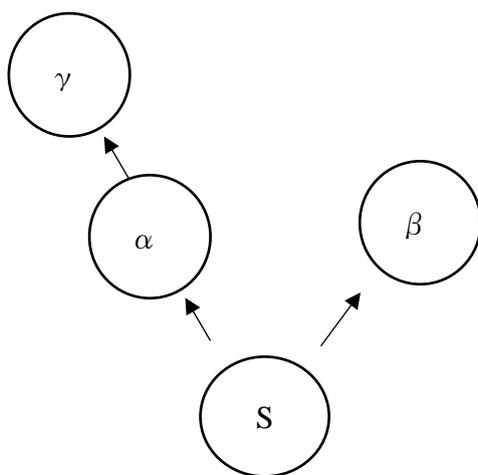
この節で述べたことを、再度確認しよう。「非存在」という語が多義的であるように、「存在」という語も、実は多義的なのであった。それは、シナリオ A の成立を表す意味での「存在するようになること」と、シナリオ A 中の「現在存在する(ある時点で存在する)こと」の違いである。シナリオ A とシナリオ B をわかつのは「現在存在」があるかどうかだが、シナリオ A と「現在存在」は別のものであった。本節で述べたことを踏まえた上で、次節の議論へ移っていく。

#### 4. シナリオ A とシナリオ B はどこから眺められているか？

次に、ベネターは誕生害悪論を述べる際に、シナリオ A とシナリオ B を等しく眺めるような第三の視点(世界 S)を暗黙理に密輸入していることを指摘する。

<sup>33</sup> 例外があるとすれば、不存在における快樂の不在が剥奪を意味しない場合である。つまり、生きていたとしたら快樂を享受しているような可能世界が存在しない場合である。

A と B を等しく眺めるような視点を世界 S と呼ぶことにする。また、存在者 X が存在する世界、かつ、世界 S から到達可能な世界を世界  $\alpha$ <sup>34</sup> と呼ぶことにする。また、存在者 X が存在しない世界、かつ、世界 S から到達可能な世界を世界  $\beta$  とする。存在者 X が存在しない世界、かつ、世界  $\alpha$  から到達可能な世界を世界  $\gamma$  とする（ただし、世界 S からは直接には到達できない世界とする）。以上のことを図に表すと、次のようになる。なお、矢印は到達可能性を表す。



世界 S とは、可能世界  $\alpha$  と可能世界  $\beta$  を等しく見渡すことができるような世界のことである<sup>35</sup>。シナリオ A は、世界 S、可能世界  $\alpha$ 、可能世界  $\gamma$  からなる世界の集合と言い表す<sup>36</sup>ことができる。シナリオ B は、世界 S と世界  $\beta$  からなる世界の集合と言い表すことができる。

ところで、世界 S は「清水の図 2」においてどこを占めるのだろうか。シナリオ A が現実である場合は、世界 S は「未存在」であり、シナリオ B が現実である場合は、世界 S は「非存在」である。直観的に考えるならば、世界 S において  $\alpha$  か  $\beta$  が選択されることで、シナリオ A か B が実現される。世界 S はシナリオ A の一部でもあり、シナリオ B の一部でもある。

<sup>34</sup> 前章で、私が「現在存在」と述べたものはシナリオ  $\alpha$  と同義である。

<sup>35</sup>  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  は可能世界である。S も同じように可能世界と考えることもできるかもしれない。だが、シナリオ A が実現してもシナリオ B が実現しても、S は成立しているので、世界と呼ぶことにする。また、S は、実は世界ですらないのではないかといった問いも考えられるが、これらは今後の課題としたい。

<sup>36</sup> 暫定的な定義である。もしかしたら、このような還元には問題を含んでいるかもしれない。しかし、このように考えることで新たにわかることがあるので、ひとまず暫定的に定義する。

ベネターにおいて、世界 S が密輸入されていること、そして、シナリオ A とシナリオ B を、世界 S、可能世界  $\alpha$ 、可能世界  $\beta$ 、可能世界  $\gamma$  を使って翻訳できることをこれから論じる。

2 節で確認した通り、ベネターはシナリオ B の苦痛の不在を、シナリオ A に存在する人 (X) の利害に照らし合わせて判断する。同じように、(可能) 世界  $\beta$  における苦痛の不在は、(可能) 世界  $\alpha$  に存在する人 (X) の利害で判断する。また、(可能) 世界  $\beta$  は、世界 S からのみ到達可能な世界であるが、世界 S において X は存在しない。よって、世界  $\beta$  における快樂の不在は、剥奪を意味しない。決して存在しないことによる快苦の不在に関するベネターの説明は、筆者の提案する世界 S、可能世界  $\alpha$ 、可能世界  $\beta$  を使っても同様の説明ができるため、翻訳に問題はない。

ところで、ベネターの議論に戻って、次のようなことを述べておきたい。一つの現実世界において、シナリオ A とシナリオ B が両立する場合もあることだ。BNHB において、四つ目の非対称性<sup>37</sup>について記述した箇所に顕著であるので、それを例に考えてみる。

現実世界において、とある島で苦しむ人々は存在するが、火星人は存在しない。この場合、現実世界では、とある島で苦しむ人々に関してはシナリオ A が成り立つが、火星人にはシナリオ B が成り立っているといえる。

次に、ベネターは四つの非対称性を説明する際に、暗黙理に世界 S を導入していることを確認する。基本的非対称性は四つの非対称性を説明することができるので、妥当性が認められるのであり、ベネターによれば、四つの非対称性は広く受け入れられていると言う。四つの非対称性を一つずつ確認していこう。

#### (i) 生殖に対する利益の非対称性

悲惨な人生を送るだろう人々を生み出すことを避ける義務はあっても、幸福な人生を送るだろう人々を生み出さなければならない義務はない

While we have a duty to avoid bringing into existence people who would lead miserable lives, we have no duty to bring into existence those who would lead happy lives.

---

<sup>37</sup> Benatar (2006), p.35. なお、Benatar (2012)で述べられている「遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性」にも同様のことが当てはまると考えている。

前半の「悲惨な人生を送る人々を生むことを避ける義務があること」は「苦痛の不在は良い」によって説明され、後半の「幸福な人生を送る人々を生む義務はないこと」は「快樂の不在は悪くない」によって説明されるとベネターは考えている。生殖に対する利益の非対称性（以下、(i)）を理解するには、世界 S が必要である。

まず、(i) の前半部分が「悲惨な人生を送っている人々を生むことを避ける義務があった」とはなっていない。また、(i) の後半部分も「幸福な人生を送っている人々を生みださなければならない義務などなかった」とはなっていない。(i) の前半部分に当てはまることは、後半部分にも同様の論点が当てはまるので、前半に絞って考察していく。シナリオ A が現実であり、悲惨な人生を送る人がいて、その人を生んだ親は、生まない義務があったのに遂行できなかった、とはなっていない。生まない義務を遂行できるのは、悲惨な人生を送る当の人々がまだ存在していない場合である。よってシナリオ A が現実である場合は、ベネターの提示する (i) の前半に当てはまらない。そして、シナリオ B が現実である場合も、(i) の前半は当てはまらない。なぜなら、決して存在しないシナリオなのだから、そのシナリオの中で子供を存在させることは矛盾にあたる。同様の理由で後半部分も解釈できる。

(i) を理解するためには、悲惨な人生（幸福な人生）を送る人々が存在する場合と、悲惨な人生（幸福な人生）を送る人々が存在しない場合の二つを等しく眺めることができるような視点が必要である。それが、筆者の言葉で言うなら世界 S であり、(i) は、世界 S から可能世界  $\alpha$  と可能世界  $\beta$  を眺めて比較しているのである。次に、予想される利益の非対称性を検討する。

#### (ii) 予想される利益の非対称性

子供を持つ理由として、その子供がそれによって利益を受けるだろうということをおかしい。子供を持たない理由としてその子供が苦しむだろうということをおかしいわけではない

It is strange to cite as a reason for having a child that that child will thereby be benefited. It is not similarly strange to cite as a reason for not having a child that that child will suffer.

予想される利益の非対称性（以下、（ii））も（i）と同様の理由で、世界 S が必要である。（ii）の前半部分の最後が「that child thereby was benefited」とはなっていないこと。また、後半部分の最後が「that child suffered」とはなっていないこと。このことより、（ii）を理解する際も、子供を持つ場合と子供を持たない場合を等しく見渡すような視点（つまり世界 S）が、密輸入されている。次に回顧的利益の非対称性にうつる。

（iii） 回顧的利益の非対称性

苦しんでいる子供を存在させてしまった場合、その子供を存在させてしまったことを後悔すること、そしてその子供のためにそれを後悔することは理にかなっている。対照的に、幸せな子供を存在させることができなかった場合は、その子供のためにそのできなかったことを後悔するのはいない。

When one has brought a suffering child into existence, it makes sense to regret having brought that child into existence—and to regret it for the sake of that child. By contrast, when one fails to bring a happy child into existence, one cannot regret that failure for the sake of the person.

回顧的利益の非対称性（以下、（iii）とする）に関しては、（i）や（ii）とは事情が異なる。苦しんでいる子供を存在させた場合はシナリオ A における世界  $\alpha$  であり、幸せな子供を存在させることができなかった場合はシナリオ B における世界  $\beta$  に該当するからだ。だが、BNHB の記述をみれば、世界 S を密輸入していることが分かるので、確認していこう。

しかしながら、人々を存在させることのみが、私たちが選択したことによって存在する人物を目的として、後悔することができる

However, only bringing people into existence can be regretted *for the sake of the person whose existence was contingent on our decision*<sup>38</sup>.

---

<sup>38</sup> Benatar (2006), p.34.

この箇所では、シナリオ A に存在する人物は、「私たちが選択したことによって存在する人物 *the person whose existence was contingent on our decision*」と表現されている。選択 *decision* というのは、子供が存在するか、存在しないかという選択だと考えるのが妥当だろう。(iii) 自体は世界 S を指してはいないが、(iii) から世界 S がある (あった) ことが読み取れる。最後に、遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性にうつる。

(iv) 遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性

私たちが遠くで苦しんでいる人々のことを悲しく思うのは当然だ。それとは対照的に、無人の惑星や無人島、この地球の他の地域に存在しない幸せな人々のために涙を流す必要はない。

*We are rightly sad for distant people who suffer. By contrast we need not shed any tears for absent happy people on uninhabited planets, or uninhabited islands or other regions on our own planet.*

遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性 (以下、(iv) とする) は、唯一世界 S を導入しなくても理解できる非対称性である。この (iv) は、一つの現実世界を指している。つまり、遠くで苦しんでいる人々に関してはシナリオ A が成立し、無人島に存在し得た人々に関してはシナリオ B が成立していると言うことである。

上記の考察を踏まえた上で、筆者の見解を述べる。(i) と (ii) に関しては、世界 S のことを指しており、世界 S を導入しなければ理解できないと考える。(iii) は、シナリオ A またはシナリオ B のことを指している<sup>39</sup>が、(iii) の中に世界 S の存在も示唆されている。(iv) に関しては、世界 S を導入しなくても、理解できる。このことから、筆者が世界 S と呼ぶものを、ベネターも暗に想定していると考えることができる。だが、世界 S の密輸入が、四つの非対称性全てに該当するものではないため、本論の指摘が十分な説得力を持つかどうかまでは分からない。もし筆者の指摘が正しければ、世界 S を導入しなくても問題なく成立するのは (iv) だけであるため、基本的非対称性の妥当性はその分だけ弱くなるものだと考えられる。ベネターは、世界 S の密輸入を認めるか、基本的非対

<sup>39</sup> 清水の言葉で言うなら、シナリオ  $\alpha$ 、シナリオ  $\beta$  である。

称性の妥当性の弱体化を受け入れなければならない。

次節では、今まで考察した議論を踏まえて、ベネターの誕生害悪論を再検討してみる。

## 5. 誕生害悪論及び反出生主義に残された新たな課題

ベネターは、基本的非対称性を根拠に、「存在するようになることは常に害悪である」と主張した。この主張は二つの意味に分かれる。一つは、実際に生まれた人の誕生の善悪を評価している場合（生まれてこない方が良かった。以下、誕生否定<sup>40</sup>と呼ぶことにする）と、もう一つは出産の善悪を評価している場合（子どもを生むべきではない。以下、出産否定<sup>41</sup>と呼ぶことにする）である。今まで議論したことを踏まえて、ベネターの議論を再考してみる。なお、本論では、出産否定に比重を置いて、考察する。

誕生否定の場合、世界  $\alpha$  もしくは世界  $\gamma$  が現実である。この場合、 $\alpha$  に存在する（存在した）人の利害を参照して、シナリオ A とシナリオ B を評価する。

一方、出産否定の場合、世界 S が現実でなければならない。可能世界  $\beta$  は「X が存在することも可能であった」世界であるかもしれないが、「X が存在することも可能である」世界ではない。可能世界  $\beta$  およびシナリオ B は、X が決して存在しない世界であるため、可能世界  $\beta$  及びシナリオ B において出産が可能であることは語義矛盾に陥ってしまう。シナリオ A が現実である場合は、既に X が存在しているので、X の出産を避けることができない。

もしベネターが世界 S の密輸入を認めない場合、二つほど新たな困難が発覚する。一つ目は、前節でも述べた通り、基本的非対称性の説明力が弱くなることである。二つ目は誕生害悪論から出産否定を導くことができなくなることだ。

もしベネターが世界 S の密輸入を認める場合、それはそれで新たな問題が生ずる。それは、世界 S が現実である場合、世界 S において、シナリオ A とシナリオ B を正しく比較することができるのかどうか、実は自明ではないことである。

シナリオ A とシナリオ B を正しく比較できないことの核心は、次のことにあ

---

<sup>40</sup> 森岡 (2021b)から拝借した。

<sup>41</sup> 森岡 (2021b)から拝借した。

る。シナリオ A とシナリオ B を等しく眺めるような視点に立たなければならないにも関わらず、その視点は永遠の相のもとに眺めたものではなく、現実世界でなければならない点である。つまり、現実世界においてシナリオ A とシナリオ B を等しく眺めるということが矛盾を含んでしまっているということだ。

世界 S から可能世界  $\alpha$  と可能世界  $\beta$  を比較することはできるかもしれない。だが、何度も述べるように、シナリオ A と世界  $\alpha$ （「現在存在」）は別であった。現実世界が世界  $\alpha$  から、世界  $\gamma$  に移行したとしても、「存在するようになった（なる）こと」が決して消え去るわけではない。シナリオ A は世界  $\alpha$  においても、世界  $\gamma$  においても成立している。

筆者が疑問に思っていることは、「X が存在する可能世界（可能世界  $\alpha$ ）」単体では「存在するようになること *coming into existence*」及びシナリオ A を表すことができていないのではないかということである。シナリオ A を表すには、世界  $\alpha$  が世界 S と時間的に関係していなければならないと考えている。なぜかというと、世界  $\alpha$  と時間的に関係している世界であるなら、現在において世界  $\alpha$  が実現してなくてもシナリオ A は成立しているからだ。

シナリオ A とシナリオ B の比較について、考えてみる。確認をしておくと、世界 S が現実である場合、世界  $\alpha$  と世界  $\beta$  は、世界 S から見ると可能的な未来である。可能的な未来という言葉で私が指しているのは、まだどちらが現実になるか確定していないということである。可能的な未来は、どちらかが現実になるかもしれない。だが、世界  $\alpha$  も世界  $\beta$  も可能的な未来にとどまっているならば、世界 S においては現実の未来ではなく、時間的に関係していないということだ。つまり、世界  $\alpha$  が可能的な未来にとどまる場合、世界 S をシナリオ A が成立している世界とみなすことはできないのではないか。

以上により、世界  $\alpha$  が可能的な未来にとどまる場合、世界  $\alpha$  でシナリオ A を表すことができないので、世界 S において、シナリオ A とシナリオ B を比較する術はないと考える。

また、上記の議論は、森岡が「非存在／非生成問題<sup>42</sup>」と呼ぶものに酷似しているように思える。事実、森岡の次のような指摘は、私の議論とほとんど同じことを論点にしている。

---

<sup>42</sup> 森岡(2020), Morioka(2021).

ここでもっとも重要なのは次の点である。すなわち、私が生まれてくる場合、生まれてきたことの善悪を判断するところの「私という主体」それ自体が、生まれてくるという出来事によってはじめてこの世に存在するに至るといふ点である。私という主体がどこか宇宙の外側に存在していて、そこから見て「私が生まれてこない場合の善悪」と「私が生まれてくる場合の善悪」を判断する、というふうにはなっていないのである。ここが決定的であり、ベネターは誕生害悪論においてこの論点を取り逃がしていると言わざるを得ない<sup>43</sup>。

その上で、本論の議論と森岡の議論は同様のことを論じていると、筆者は考えている。「私が生まれてくる場合、生まれてきたことの善悪を判断するところの『私という主体』それ自体が、生まれてくるという出来事によってはじめてこの世に存在するに至る」といふ箇所は、シナリオ A は世界  $\alpha$  が実現する（世界 S と時間的に関係する）ことによってはじめて成立し、想定できるという点と類比的である。

また、「宇宙の外側から『生まれてくる場合』と『生まれてこない場合』を判断する、とはなっていない」といふ箇所は、世界 S から  $\alpha$  と  $\beta$  を比較することと、世界 S からシナリオ A とシナリオ B を判断することとは別のことである、という論点と類比的である。

本論が森岡の議論と異なるところが三つほどある。一つ目は、本論は、客観的な存在者に関する誕生及び出生を議論していることだ。森岡は、主体の誕生について議論している。二つ目は、本論は、ベネターの記述から読み取れることを用いて、議論を構成したことだ。ベネターに対して有効かどうかとは別に、「非存在／非生成問題」自体は、森岡<sup>44</sup>も述べる通り、ベネターに対して外在的な批判である。三つ目は、本論は森岡の議論の対偶に近いことだ。森岡の主張を「生まれてくることを考えるならば、宇宙の外側の視点（二つの世界を等しく眺める視点）に立てない」と解して良いならば、本論の主張は「世界 S から可能世界  $\alpha$  と可能世界  $\beta$  を眺めると、シナリオ A とシナリオ B を比較することができない（のではないか）」というものである。

---

<sup>43</sup> 森岡(2020), pp.283-284.

<sup>44</sup> 森岡(2021a)

まだまだ議論すべきところは多いが、萌芽的な論点を確認できたので、ここで筆を置くことにする。

## 6. おわりに

本論ではベネターの議論を取り上げ、「存在」という言葉にも多義性がある点や、シナリオ A と B を等しく見渡す視点を密輸入している点を指摘した。また、以上のことを加味して、議論を再構成すると、ベネターの論証には新たな問題が含まれていることが発覚した。本論ではベネターの議論を扱ったが、筆者としては、本論の指摘は全ての反出生主義に対する指摘になりうると、考えている。これらは今後の課題である。本論には至らない点も多かったかもしれない。それでもなお、新しい視座を少しでも読者に届けることができたのならば、筆者としてはこの上なく幸いである。

## 文献一覧

Benatar, David (2006). *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*. Oxford University Press.

Benatar, David (2012). “Every Conceivable Harm: A Further Defence of Anti-Natalism.” *South African Journal of Philosophy*, 31(1):128-164. (邦訳：デイヴィッド・ベネター「考え得るすべての害悪 — 反出生主義への更なる擁護」、小島和男訳、『現代思想』11月号、40-83頁。)

Benatar, David (2013). “Still Better Never to Have Been: A Reply to (More of) My Critics.” *Journal of Ethics* 17:121-151.

Boonin, David (2012). “Better to Be.” *South African Journal of Philosophy* 31(1):10-25.

Magnusson, Erik (2019). “How to Reject Benatar’s Asymmetry Argument.” *Bioethics* 2019:1-10.

Morioka, Masahiro (2021). “What is Birth Affirmation? — The Meaning of Saying “Yes” to Having Been Born.” *Journal of Philosophy of Life* 11(1):43-59.

- 入不二基義(2015)『あるようにあり、なるようになる ― 運命論の運命』講談社
- 榊原清玄(2021a)「ベネター型反出生主義へのブーニンによる反論の検討」『人文×社会』第1号、229-249頁。
- 榊原清玄(2021b)「ベネターの基本的非対称性における非存在の検討」『人文×社会』第3号、98-113頁。
- 鈴木生郎(2019)「非対称性をめぐる攻防」『現代思想』11月号、114-124頁。
- 森岡正博(2020)『生まれてこないほうが良かったのか? ― 生命の哲学へ!』筑摩選書
- 森岡正博(2021a)「ベネターの誕生害悪論はどこで間違えたか」『現代生命哲学研究』第10号、1-38頁。
- 森岡正博(2021b)「反出生主義とは何か ― その定義とカテゴリー」『現代生命哲学研究』第10号、39-67頁。
- 吉沢文武(2022)「デイヴィッド・ベネターの非対称性論証を再構成する」『人文公共学研究論集』第44号、32-47頁。